

**Yahoo!基金2021年度(継続)被災地復興調査助成プログラム
「ユース語りべが持つ心のケア力&防災教育推進力向上事業」実施概要
「東日本大震災ユース語りべインタビューおよび報告会を実施」(初年度)**

年月	活動内容
2021年11月	東日本大震災被災地ユース語りべ キックオフミーティング開催
2021年12月～2022年3月	東日本大震災被災地ユース語りべに対する遠隔インタビュー
2022年1月	ユース語りべとの対面インタビュー(宮城県石巻市・東松島市・女川町)
2022年3月	ユース語りべとの対面インタビュー(岩手県釜石市)
2022年8月	ユース語りべが持つ心のケア力&防災教育推進力向上事業報告会(神戸市 兵庫県民会館とオンライン)

「語らいの場」事業および成果に関するアンケートの実施(2年目)

2022年11月	経験をつなぐ語らいの場 高知市 市立城西中学校 全校生徒と教職員
2023年1月	時間をつなぐ語らいの場ー阪神・淡路大震災と東日本大震災ー 神戸市 兵庫県民会館とオンライン
2023年3月	場所をつなぐ語らいの場ーまじわる、語り部と聞き手ー 仙台市 せんだい3.11メモリアル交流館とオンライン
2023年5月	場所と経験と時間をつなぐ語らいの場ーまじわる、語り部と聞き手ー 東京都 ガーデンテラス紀尾井LODGEとオンライン
2023年8月	ユース語りべの語りが持つ防災教育力と心のケア力を考える オンライン成果報告会
2023年7～8月	ユース語り部事業の成果に関するアンケート調査の実施

専門家および事務局スタッフ

小田 隆史 東京大学大学院総合文化研究科 准教授

齋藤 幸男 元・高校教員 東北大学非常勤講師(震災時、石巻西高校 教頭)

佐藤 敏郎 小さな命の意味を考える会 代表

高橋 哲 芦屋生活心理学研究所所長 心理士

船木 伸江 神戸学院大学現代社会学部・社会防災学科 教授

森本 晋也 元・釜石市立釜石東中学校教諭

石井布紀子 NPO法人さくらネット代表理事 子どものエンパワメントいわて

諫訪 清二 兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科 客員教授

中野 元太 京都大学防災研究所 助教

浦島 博幸 一般社団法人子どものエンパワメントいわて 代表理事

成尾 春輝 一般社団法人子どものエンパワメントいわて スタッフ

佐藤 来未 一般社団法人子どものエンパワメントいわて スタッフ

菊池のどか ユース語りべ

清水 葉月 一般社団法人スマートサプライビジョン ユース語りべ

代表者謝辞とメッセージ

若者たちの震災体験は、「語らいの場」づくりにより、若いユース語り部たちの心のケアにもなり、復興防災教育の機会を生み出し、創造的復興の一助となりえます。私たちは当事業を通して、東日本大震災から10年が過ぎ、複雑な課題を抱えている子どもたちによりそい続けるうえで、深く力強い示唆を得ることができました。

そして、「語らいの場」がつながり広がることを願い、今後もゆるやかなネットワークづくりを進めます。関係者のみなさまとともに歩み続けることが大切であると理解できました。

全ての関係者のみなさまへの感謝の気持ちをお伝えするとともに、より多くのみなさまのご参画を得られるよう願い、当報告リーフレットを作成いたしました。お気軽にメッセージやお問い合わせを頂くことを願っております。

ここまで歩みをさせて頂き、ありがとうございます。引き続きどうぞよろしくお願ひいたします。

子どものエンパワメントいわて 代表理事 浦島 博幸

一般社団法人子どものエンパワメントいわて

〒026-0034 岩手県釜石市中妻町3丁目14-26 Tel.080-8210-0906 (代表)

<http://www.e-patch.net/> e-mail:epatch311@gmail.com

**Yahoo!基金2021年度(継続)被災地復興調査助成プログラム
「ユース語りべが持つ心のケア力 & 防災教育推進力向上事業」報告書**

当事業は創造的復興支援のあり方を探り、つなぐ試みです

東日本大震災以降、「子どものエンパワメントいわて」は、子どもたちの学習支援を続けてきました。自学自習を通して子どもたちの心の声を聴く支援に手応えを感じ、長期的な支援の在り方を模索する中で、「心のケアと一体的に進める復興防災教育」として、若者の語りを活かすケアの取り組みに注目しました。

先に被災した阪神・淡路大震災の被災地では、多くの被災者が辛い体験を語り始め、震災体験の継承と発信は被災地の責務ととらえる考え方である「被災者責任」という言葉も生まれました。ただ、被災した子どもたちの体験は、親や教師によって語られることはあっても、本人が語ることはほとんどなく、大人による語り継ぎが主となりました。

その後、東日本大震災や熊本地震の被災地において、子どもたちが体験を語り合う場づくりが行われ、子どもの頃に被災した若者同士の語りや、被災時の同世代にあたる年代の子どもたちに体験をわかちあう機会の意味が見え始めました。

「ユース語りべが持つ心のケア力&防災教育推進力向上事業」は、震災体験の継承のあり方を問い合わせ、創造的復興支援のあり方を明らかにすることを目的に実施し、成果を未来につなぐよう試みました。

私たちは、ユース語りべとの対話を通して、「語りの意味」を4つに分類しました

「人はなぜ被災体験を語るのだろう?」語ることで人の役に立ちたい、社会の防災力を向上させたいという願いが原動力の一つであることには間違いない(「防災教育推進力」と呼びたい)。しかし、「同じことを繰り返して欲しくないから」という理由だけで、辛い体験や内心を語ることができるのであるのか?もしかしたら語りべは、繰り返し語りながら自分の体験の意味を考え、捉え直そうとしているのかもしれない(「心のケア力」と呼びたい)。

事業の1年目では、語りには二つの意味が見いだせる、と結論づけることができました。二つの意味とは、「社会的な意味」と「個人的な意味」であり、語りべの話はこの二種類の語りが混ざり合って構成されています。

社会的な意味を持つ語り

- ◎語る側は、被災の事実、防災の知識・技能を伝えたい。
- ◎聞く側は、事実を知りたい、その事実から防災を実行に移したい。
- ◎防災教育的な語りともいえる。
- ◎そこには個人的な意味を持つ語りも、まじりあう。

個人的な意味を持つ語り

- ◎語る側は、自分の災害体験と向き合い、その苦しさ、悲しさ、心の揺れ、時には楽しかったことも含めて、心のなかにある感情を聞き手とやり取りする。
- ◎聞く側は、ただ聞く、寄り添う。
- ◎あるいは両者がただ語り合う。
- ◎心のケア的な語りともいえる。
- ◎そこには社会的な意味を持つ語りも。

語りは聞き手を想定します。しかし、ユース語りべと話す中で、他者のために話しているだけではなく、自分のために話していることが予測できました。そこで、ヒアリング調査を重ね、「社会的な意味を持つ語り」「個人的な意味を持つ語り」「他者のための語り」「自分のための語り」という指標でマトリックスを作り、語りべの語りを4つに分類することとしました。

社会的な意味を持つ語り

出来上がったストーリーの語り・揺れない語り

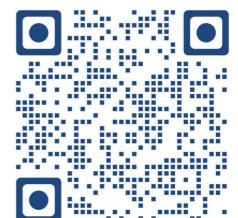
- 自分そのための語り**
- ◎自分の失敗をあえて伝え、受け入れてもらうことで安心感を覚える
 - ◎防災を実行してもらうことで語りの達成感を持つ

- 他者のための語り**
- ◎災害の失敗談、成功談、教訓を伝える
 - ◎防災の知識を伝達する

- 自分そのための語り**
- ◎ただ誰かに聞いてもらいたい
 - ◎聞いてもらえたことで安心感を覚える
 - ◎語りながら体験と向き合い、整理しようとする

- 他者のための語り**
- ◎心の中にしまっていた思い、しまっておきたい体験を吐露する
 - ◎防災にとりくもうという、聞き手の心への呼びかけとなる

このリーフレットは、yahoo基金!復興助成を受けて一般社団法人子どものエンパワメントいわてが作成しました。



語らいの場を未来へ
動画はこちら

「語らい」の意味を見える化し、「語らいの場づくり」に取り組みました。

被災体験の語りは、語りべから聞き手への一方通行が多い。聞き手が子どもたちなら、講話の後で感想文を書き、体験談の記憶と自分の考えを整理する。大人が聞き手なら、ちょっとした質疑で終わり、受け止めは聞き手にゆだねられることが多い。ユース語りべとのインテビューと話し合いを通して、彼ら、彼女らが聞き手との「相互のやり取り」に価値を見出していることが分かってきた。

- ◎自分の語りが聞き手に伝わっている実感を持つ。
- ◎聞き手からの質問やコメントから、語りべは自分の話を捉え直して再構築する。
- ◎聞き手はやり取りを通して理解と共感を深めていく。



「相互のやり取り」を被災体験の
「語らい」の場において大切にする。
自由なやり取りはそんな活動を生み出す。

- ◎辛かった時を支えてくれた、ただ寄り添ってくれるだけの人の存在。
- ◎語っていいんだ、聞いてくれる人がいるんだという安心感。
- ◎語りべと聞き手の相互理解と共感。語らなくても、語れなくても、ただその場にいるだけで被災者におだやかな気持ちをもたらす。

私たちは、安心感や相互理解を
生み出す場を
「語らいの場」と呼ぶこととした。

- ◎匿名性のない場：語りべも聞き手も、お互いが誰であるかがわかっている場
- ◎自由な意思が尊重される場：語りべの語りに誘発されて、聞き手も自らの体験や考えを語ってよい場
- ◎強要のない場：語りべも聞き手も、語らないことも尊重される場

「語らいの場」をどう作る？を見える化しました。

- ◎参加者はみんな対等である。会場は講演型の設定ではなく、ラウンドテーブル型がよい。軽食や飲み物など、場が和むものがあればなおよい。
- ◎対話の進行役、つなぎ役としてのファシリテーターを置く。打ち解けた雰囲気づくりに気を配り、対話が自然と動き出せば、あえて仕切る必要はない。
- ◎自己紹介をしてお互いのことを知る。
- ◎いくつかの必ず守って欲しいルールを最初に共有する。
- ◎体験を根掘り葉掘り聞きだす場ではない。
- ◎すべての参加者に話す権利があり、話さない権利もある。つまり、語りべも、聞き手も、話したくないことは話さなくてよい。
- ◎語りべ（話題提供者）から話し始めるが、講演のような長時間の語りはしないこととする。話の区切りごとに、質疑や対話を取り入れる。
- ◎後半は自由に意見や感想を話し合う。

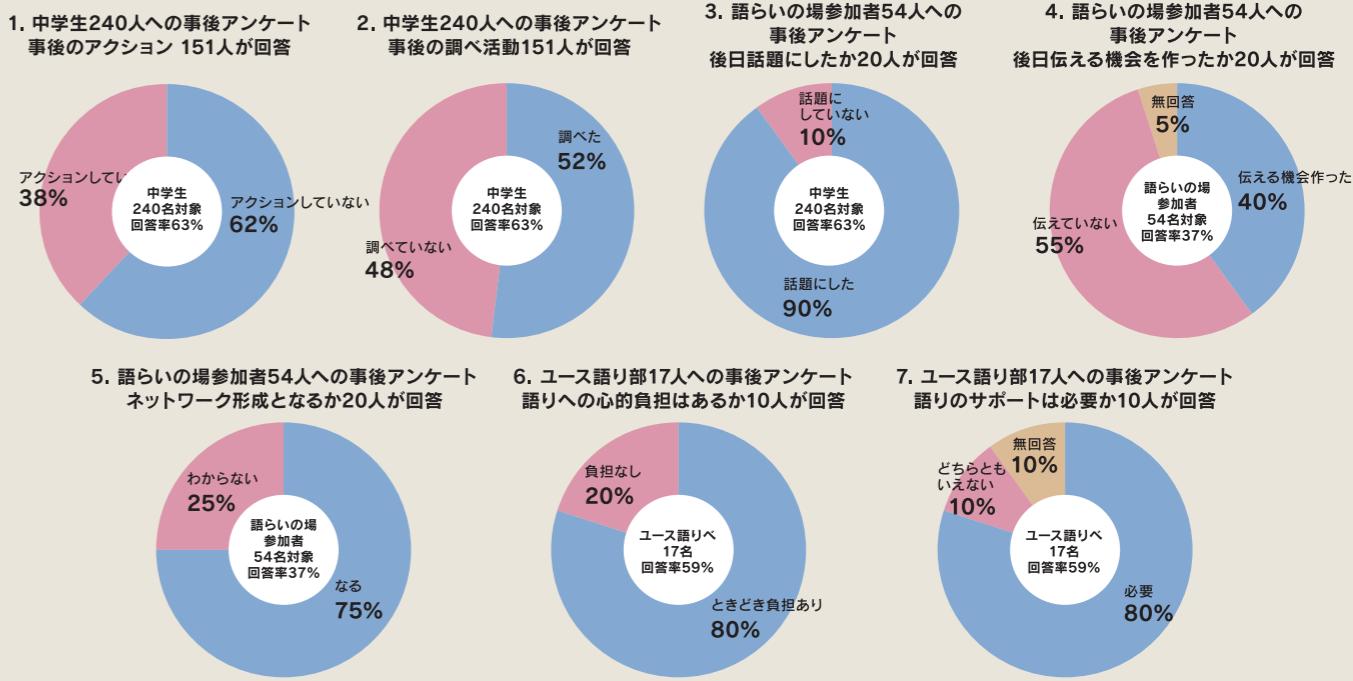
ユース語りべたちのアンソロジー

- ◎聞き手の希望を聞きながら、一生懸命に事実を伝えようとするけれど、そうすればするほど、疲れてしまう。
- ◎目の前の聞き手は、単に辛い体験を聞きたいただけなのだろうか。
- ◎大人の反応は「かわいそうだね」、「辛かったんだね」、まさしく「the同情」。私たちは同情が欲しくて語っているのではない。
- ◎どんな話をしても「奇跡」という言葉でくられてしまう。震災前の日常や学校生活はなかったことにされてしまう
- ◎あらかじめ記事はできていた、その中の「」の部分に入れる言葉を引き出すまで、同じ質問をぶつけてきた。
- ◎小さな子供の頃は震災を理解できず、ただ漫画の世界、ファンタジーの世界と感じていた。数年を経て自分の体験を言語化できるようになってくると、体験を正確に語ることができるようになったが、同時に体験の苦しさも増した。その苦しさも、聞き手との安心感の中では語ることができた。
- ◎親代わりの祖母を無くした。震災の悲しみに蓋をしていた。大学生になって心がしんどくなった。悲しみのどん底に落ち込んで、気力もなくなった。心配して逢いに来てくれた両親にこみ上げるものを吐き出した。両親は聴いてくれた。「震災のあと1年、何も言わなかつたね」と言ってくれた。それから自分の心を理解できるようになった。
- ◎日常を語る場を大人が作ってくれて、そこでは震災のことも話せた。もちろん、つらいことだけではなく、楽しいことも語つていいいんだと思ったことが大きい。辛い時にじっくりと話を聞いてくれる人がいて安心して語れた。
- ◎同じ思いを持つ仲間の存在は大きい。一人では伝えられないが、仲間と一緒に伝えられる。
- ◎聞いてくれる人がいて、安心感を持って語ることで、自分の心が休まる感覚がある。

アンケート結果を分析し、創造的復興支援への貢献の可能性を探りました。

本プロジェクトでは、語らいの場に参加してくれた高知県・城西中学校の生徒、神戸、仙台、東京の語らいの場の参加者、そしてインタビューや語らいの場に協力してくれたユース語りべに対してアンケート調査を行った。その結果のキーワードは「防災アクション」「広がり」「ネットワーク」である。特に城西中学校の生徒らに顕著に見られたのは、語り聞いた後に、「家具の固定」や「ハザードマップの確認」など実際の防災アクションにつながったということである。そして、語らいの場の参加者は語りべの話を、「職員研修」「防災講話」「学校の授業」等で伝えており、語らいの場を超えて、体験が広がっているということである。さらにユース語りべは、「困った時に相談しあえる」「一緒に語りべすることで発信力が増す」といった理由からユース語りべのネットワークを必要と感じていることも明らかになった。

- ◎自分の語りが聞き手に伝わっている実感を持つ。
- ◎聞き手からの質問やコメントから、語りべは自分の話を捉え直して再構築する。
- ◎聞き手はやり取りを通して理解と共感を深めていく。



◎「経験をつなぐ」語らいの場：印象にのこったこと

- 家が流されて、避難しなかったことを後悔した
- 油断していたら命を落としたりする。地震が起きてからでは遅いから家でも地震に対する準備が必要。
- 話を聞いた後「避難場所どこ？」、「改めて準備しなければ」と家族と話題にした。

◎「経験をつなぐ」語らいの場：語りを聞いた中学生はその後、どうアクションしたのか。

アンケートに回答した151人のうち、79人(52%)がユース語りべの話を聞いた後、防災のことを「本を読む」「テレビ番組を見る」「SNS等で見る」「新聞記事などを読む」ことを通じて、自分で調べている。

◎語らいの場の参加者は、語りべの体験談を多くの人に伝えている。

アンケートに回答した19人のうち、8人(42%)が語りべの体験談を「職員研修」「防災講話」「学校の授業」などで伝えていると回答している。

ユース語りべの思いが見えた

1. ユース語りべは、聞き手への気遣いも含めて、自分の体験を話すときに心理的負担を感じる傾向にある。

アンケートに回答した10人のうち8人(80%)が、自分の体験を誰かに話すときに、心理的な負担を「ときどき」感じると回答。「相手に気を遣わせてしまわないか」「語ることによって苦しむ人が居たらどうしようと不安を感じる」「思い出すことに抵抗がある」と感じている。

◎直接やりとりできる場所でした。堅苦しいイメージが少しは和らいだ気がします。

2. ユース語りべが感じるネットワークの必要性

アンケートに回答した9人のうち、8人はユース語りべのネットワークが必要だと感じている。「困った時に相談しあえる」「語りべの依頼があったときにお互いの長所などで連携できる」「心理的サポートとしても当事者たちでつながるのは良いと思う」「一緒に語りべをすると発信力が増す」と回答があった。

◎様々な方と繋がることができるので、自分にとってすごく意味のある場所

◎自分の語れるようになった経験に対して、なぜなのか深めるような質問されたこと(普段は一方的に話すことで終わってしまうから)

語らいの場に登壇したユース語りべにも変化が生まれた

◎ユース語りべの中にも、様々な年代、被災体験を持つ人が居て「語り部」というものに対してもそれぞれ認識が違うことが分かった。

◎「語る」ことに対して、迷つてもいいんだということを知った。また、語る側も聞く側も、双方が参加できる「語らい」が今後増えたらいいなと思った。